Teku-Teku FEATURE

歴史に名を刻む、美しき市川和紙。

三椏［みつまた］
楮［こうぞ］

山梨の和紙の歴史は古く、奈良時代末の記録にも和紙の産地として甲斐の名が記されています。市川での紙漉きについては、「延喜23（923）年平塩に九戸、弓削に七戸の紙漉あり」という記述が古文書に残されています。その後、甲斐源氏の祖・源義清が京都から平塩の岡に移り住んだ際、伴ってきた家臣の甚左衛門が製紙に熟練していたことから、その技術を人々に伝授。ここから市川の製紙は発展していったと伝えられています。

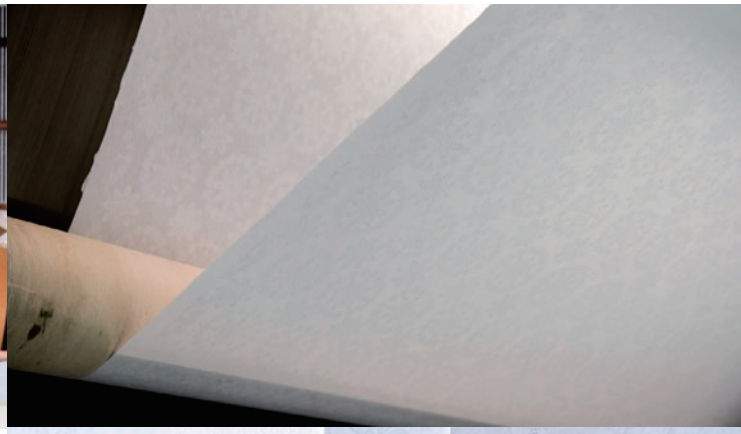
和紙の原料となる「三椏」や「楮」、そして清らかな水に恵まれた地で作られる和紙は、美人の素肌のように美しいと例えられ「肌吉紙」と呼ばれました。武田家の御用紙として用いられた市川和紙は、武田家滅亡後も徳川家の御用紙として献上。「肌吉衆」と称された紙を漉く人たちは、諸役免除などの特権を与えられ手厚く保護されていたといいます。

市川の紙漉きは家内工業からやがて近代的な製紙産業へと発展を遂げ、市川は障子紙に特化した産地として全国一のシェアを確立していきました。しかし近年は生活スタイルの洋風化に伴い障子紙のニーズは減少に転じ、市川の製紙産業も新たな局面を迎えています。

そこに台頭してきたのが、和紙を暮らしの中に取り入れやすくするという新しい流れです。千年以上の長き歴史を有する市川和紙は、紙に情熱を傾ける人々の思いで、新たな輝きの時代を迎えようとしています。

伝統と革新。切り開く新しい和紙の世界。

金長特殊製紙の製品
糸入り和紙「大波 赤」（上） 水を使って模様付けした和紙「落水紙」（下）



一瀬　浩基さん

専務取締役

金長特殊製紙株式会社
西八代郡市川三郷町市川大門2808／TEL. 055-272-5111

和紙のテーブルクロス「レース」（右上）
和紙のテーブルクロス「さくら」（右下）
桜の花びらの形に切り抜いた和紙を流し入れ漉いている。

時代が変わっても愛され続ける和紙のテーブルクロス

「昔はどこの家庭にも障子がありました。しかし生活スタイルが徐々に変わっていくと、張り替えの手間が少しでも楽になるような障子紙のニーズが高まるようになりました」と一瀬さんは語ります。

破れやすい障子紙を、どうしたら強くできるかが産地の大きな課題となりました。そこで20年ほど前、金長特殊製紙が生み出したのが糸入りの和紙の障子紙でした。「糸を和紙の間に挟み込んで補強材とするアイデアから開発したのが始まりです。意匠的にも優れていたと思いますが、当時は主にホームセンターで障子紙を販売していたため、筒形の包装で陳列される売り場では、糸入り和紙の良さを伝えるには難しいものがありました。結局、販売を諦め、糸入り和紙はほとんど活用することなく寝かせてしまうことになりました」

障子紙の需要が減少していく中、製紙産業として生き残るために、障子紙の次に何ができるのかと思案し、新たな挑戦を始めることになりました。

「すでに40年ほどのロングセラーである当社の和紙のテーブルクロスに着目しました。少ないながらも売り上げはずっと横ばい状態だったので、ホームページでも積極的に紹介し販売を始めることにしました。両面に防水加工を施したテーブルクロスは、ワインなどをこぼしても汚れをすぐに拭き取ることができ、かつ高級感と華やかさがあることで好評をいただいています。ネットで取り扱うことにより、消費者の声が直接聞けるようになり、ニーズに合った製品開発が可能となりました」

糸入り和紙と県産鹿革のコラボから生まれた生活の中の逸品

「山梨県工業技術センター、株式会社エムテド（デザイン会社）、当社の3者でチームを組み、『WASICA（ワシカ）プロジェクト』を発足しました。このプロジェクトは、伝統産業の振興と社会的課題の解決とを両立させるというコンセプトにより動き出しました」と一瀬さんは語ります。

県工業技術センターでは、捕獲された野生のニホンジカを有効活用したいという思いから、環境負荷の極めて少ないなめし技術により、真っ白な鹿革の作製に成功しました。そしてプロジェクトでは、「真っ白」という象徴的な色を有する、和紙と鹿革の二つの素材を結び付けた製品展開を始めました。

「なめし革に匹敵する強靱（きょうじん）な和紙。そこで浮かんだのが20年前に当社で開発した糸入り和紙でした。エムテドさんのアドバイスをいただき、和紙と鹿革の素材のコントラストが美しいバッグなどが、幾つか仕上がりました。その後、エムテドさんのご助力により、今年3月にはFab Cafe Tokyoでお披露目、4月にはイタリアで開催されたミラノサローネへ出展しました。こうした場を通じ、製品の魅力をさまざまな層の人たちに知ってもらえ、確かな手応えを感じることができました」

「私は製紙産業が右肩上がりではない時代にこの世界へ入ってきたので、いわば出発点はマイナスからでした。それから17年ほど経ちますがスタートがマイナスだったからこそ、たくさんの経験をさせてもらっていると感じています」

落水紙の陰影や糸入り和紙の独特な表情は光との綿密な関係がある、と和紙の魅力を語る一瀬さんからは、伝統ある和紙産業を大切に育てたいという思いが溢れていました。

市川から世界へ、広がっていく和紙の魅力。

大直の製品
「めでたや遊び うさぎの餅つき」

季節感を取り入れた「日常使いの和紙製品」誕生

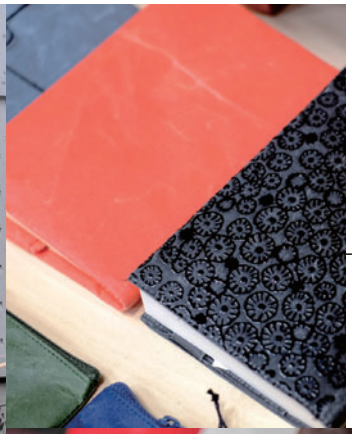
「大直では90年代に入り、障子紙以外の和紙製品の開発をしようと新たな取り組みを始め、生まれたのが『めでたや』です。お正月用品をはじめ、祝儀袋、文具などに季節感を織り込みながら、いつも身近に使っていただけるような小物作りをコンセプトにしています」と説明する一瀬さん。ブランドの立ち上げから現在に至るまで、女性スタッフが中心となり事業を進めています。「家庭などの生活の場では女性が関わる部分が多いので、暮らしの中で使う製品作りには女性ならではのアイデアが生かされるように思います」

和紙を慈しむ女性たちが生みだした、ほっこりと心が和む小物たち。

「めでたや」のスタッフは、それぞれの個性を生かし、お互いを尊重しながら魅力溢れる商品の開発をしています。

企画課の諏訪さんは「来年の干支（えと）、酉年（とり）の商品を完成させました。キメの細かさと質感に魅力がある和紙を使い、いかに良い物を作るかはもちろん大切ですが、見た瞬間に『来年を良い年にしたいな』『あの人にあげたいな』と思っていただけるような商品にしたいと思いを込めました」と語ります。

海外課の中村さんは、ベトナムに和紙の原料栽培から紙漉きまでの技術を伝えるプロジェクトや、ヨーロッパなどへの商品輸出に携わっています。「ヨーロッパでは白無地や雲竜柄などシンプルな和紙をインテリアの中に取り入れて



めでたや

女性スタッフが中心となり開発した「めでたや」商品。季節感を大切に、一つ一つ丁寧に仕上げている。

SIWA・紙和

7年ほど前に始まった新ブランド「SIWA・紙和」の開発により、強度があり縫製ができる紙でバッグや帽子、スリッパなどを作るというそれまでは考えられなかった紙の可能性を見いだした。

※「SIWA・紙和」という名前は、紙のしわと和紙の反対読みの紙和という意味。

いるので、和紙の需要は、今後さらに高まる可能性があると思っています」

営業3課の根岸さんは「大直に入って改めて和紙の魅力に気がつきました。和紙の年賀状や便箋に文字を書く、そんな暮らしの一こまがとても大切に思えるようになりました」と笑顔で語ります。

ネット販売にも早くから力を注ぎ、全国へ、そして世界へと和紙の魅力を伝え続けている大直。スタッフの皆さんの雰囲気は、和紙のような温もりと優しさを感じさせてくれるものでした。

総務部
（上左）
一瀬　亜希子さん

企画課 課長
（上中）
諏訪　陶子さん

営業3課 課長
（上右）
根岸　理紗さん

海外課 主任
（下右）
中村　杏奈さん

株式会社 大直
西八代郡市川三郷町高田184-3／TEL. 055-272-0321